山の日 制定を目指して

～高原山を愛する集い～

現在、「山の日」制定について全国的な運動が展開されています。

本町出身であり、名誉町民の船村徹先生も「山の日」制定について提言されています。

今回の集いは、本町のシンボル、高原山についてその魅力を確認し、「山の日」制定への意識高揚を目的として町内外から約六百五十名の参加者を迎えて開催されました。

船村先生によるオープニングトークはふるさとの山を語ると題し、ご自身の思い出や高原山に対する想いをユニークに語っていただき、会場は大いに盛り上がりました。

船村先生のお弟子さんのえひめ憲一さん、うちわ弾さんの歌唱も会場に彩りを与えました。

▶えひめ憲一さん

◀うちわ弾さん

▼座長の見形町長

▲船村徹先生

▼鵤工舎の小川氏

▲元町長の柿沼氏

続いて行われたのは「山の日に対する思い」と題したスペシャル対談。船村先生、鵤工舎棟梁の小川氏、元町長の柿沼氏の三名をゲストに迎え、町長の進行で行われました。純粋な山の魅力、木材生産能力や二酸化炭素吸収能力など資源としての山、海・川との包括的な自然としての山など様々な視点で山の重要さを語ってくれました。

▲「高原山へのメッセージ」を語った7人

対談終了後には、実行委員会の市川事務局長や、「山の日制定協議会」代表幹事成川氏、ひろしま「山の日」県民の集い実行委員会の畝崎氏の情報提供や活動報告がそれぞれ行われました。

また、「高原山へのメッセージ」では、中学生を含む町内在住の七名それぞれの視点から「高原山の魅力」が紹介され、会場内の皆さんの視野を広げたことと思います。

最後に、「しおやの高原山十景」が選定され、盛況の内に終幕となりました。

「山の日」制定に関する意識が啓発されるイベントになったようです。

地産都消について考える

～塩谷地域活性化シンポジウム～

地産都消って言葉を聞いたことがありますか？

これは、文字どおり「地方で生産したものを首都圏で消費する」という意味を持つ言葉です。

本町では、日量一万トンもの水利権を有していますが、全量活用されていません。

このような中、町商工会、観光協会、農業者が中心となって発足した企業組合エヌ・イー・エス（大島晴宏代表理事）が遊休化している水量を有効利活用して小水力発電を行い、発電した電気を首都圏の事業者に売電するという画期的な事業に取り組んでいます。

今回のシンポジウムは、この事業と併せて早稲田大学とブリジストンが提携して行う環境対策事業、「W－BRIDGE」の活動に取り組んでおり、協力を得て開催されました。

当日はまず、自分たちの住む町を詳しく知ることを目的に、堀口前早稲田大学副総長及び東京都環境局谷口主任の監修により、商工会青年部の皆さんと塩谷中学校三年生が共に県民の森に向かいました。

ここでは県民の森の遠山さんより説明を受け、高原山の生態や、尚仁沢湧水の起源などについて学びました。

また、株式会社ティー・シー・シーのボトリング工場で、最新の設備により製品化される工程を見学しました。生徒たちは、初めて見る設備に目を輝かせていました。

引き続いて行われたシンポジウムでは、堀口前副総長の基調講演に始まり、兵庫県立大学大学院客員教授の勝瀬氏のコーディネートによるパネルディスカッションとなりました。パネリストには、前述の堀口氏、谷口氏の他に、中小企業診断士の島田氏、企業組合エヌ・イー・エス大島代表理事、町学校教育課の森田課長補佐の五名が並びました。

ディスカッションの中では、町の有する資源、これを有効に利活用することで地域の活性化につなげるというこの取り組みは画期的なものであり、町民の方にこのような意識醸成を行うことで種を播き、事業を推進することで花を咲かせたいといったことが述べられていました。

印象的だったのが、「事業に取り組む上でリスクはあるが、取り組まないリスクもある」という言葉でした。

先進的な事例とは当然リスクがありますが、リスクを恐れて取り組まないと何も変わらない。リスクは管理することで被害を最小限にできるといった内容でした。

リスクを管理しながら、変わることができるチャンスなのではないでしょうか。